

# 『困難な時代』とプレストン・ストライキ ——階級闘争への序章——

青 木 健

## 1. プレストン・ストライキの経緯

ディケンズは、社会改良家を自負する者として、また作品に現実感を与える目的で、時事的な社会問題をアレンジした上で、作品に取り入れ、その意味を問う作家である。『ニコラス・ニッケルビー』で赤裸々に描いたスクィアーズの寄宿学校に関しては、ディケンズは馬車に揺られ、はるばるヨークシャーに赴き、その地で噂にのぼっていた、悪名高い寄宿学校を調査・取材し、それをモデルとした結果、作品の幅を広げ、質を深めた。もちろん、現実の事件を作品化するには危険を伴うものである。ヨークシャーの寄宿学校の件でも、当該の校長のみならず、その地方の学校経営者からクレームがつき、さすがのディケンズも釈明せざるをえなかった。

『困難な時代』(*Hard Times*, 1854)でも、ディケンズならではの時事的問題がいくつか作品を彩っている。その問題の一つは、イングランド北西部ランカシャー州の織物工業の町プレストンで実際に起こった、織物職人たちによるストライキと、途中から行われた工場主たちによるロックアウトに関するものである。この事件は、人々の耳目を集め、当時の報道機関(新聞・雑誌・週刊誌等)が競って報道した。ディケンズ自身も、自ら編集する『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*, 1854年2月11日号)に「ストライキ中」(‘On Strike’)と題して、このプレストン・ストライキに関する取材記事を載せている。本論では、このストライキの経緯と、作者の姿勢を明らかにした上で、小説への援用とその意義、さらに、その効果を精査することを目的とする。

まず、先行研究に依拠しながら、プレストン・ストライキのおおまかな経緯と、ディケンズの取材の内容を分析することから始めたい。K. J. フィールドディングは、「当時、国家は繁栄していたが、炭鉱労働者やレンガ職人たちはその繁栄を享受できずにいた……ストライキの勃発は、主に地方で起こったが、それはとりもなおさず、経済的不安が全国に蔓延していた証拠でもある」<sup>1)</sup>として、1853年前後にイングランドでは、ストライキが、労使間の強制的な交渉手段として、次第に意識されるようになったことを述べている。過激な例として、ウィガン (Wigan) での炭鉱労働者によるストライキを挙げている。そこでは、労働者たちは、使用者たちの会合場所であったロイヤル・ホテルを襲撃し、三十四歩兵部隊が出動する騒ぎになったという<sup>2)</sup>。

プレストンの場合、1853年10月に始まった紡績職人たちによるストライキは、その数2万人を超え、翌年5月まで29週も続いたため、使用者たちの支配に対する、労働者たちの挑戦として、全国的な関心を誘発した。プレストン・ストライキの始まりは、よくあるように賃金の問題であった。労働者側は、「10パーセントの昇給」を要求し、それに対して、使用者（工場主）側は強制されることを拒んだ。交渉はうまくゆかず、問題はエスカレートし、労使双方にとって闘いは理念の問題となってしまった。「双方の見解の違いが状況を複雑にしてしまった……表面に出た問題よりも、もっと根本的な権力闘争の様相を呈してきたからである」<sup>3)</sup>。ついには、使用者たちは工場閉鎖の擧に出た。つまり工場主によるロックアウトである。

ストライキ指導者たちは、単に10パーセントの賃金引上げを要求したにすぎないという意識であったが、使用者たちの方がより強い衝撃を受けたようである。工場主たちによる工場閉鎖を、労働者側はロックアウトと呼び、使用者たちは労働者たちのストライキを非難し、非難合戦が続いた。衝撃の強さは、どちらかという使用者側にあったため、彼らは、この騒動を賃金問題というより、階級間の闘争と捉え、第三者による仲介を拒んだ。事実関係を十分理解していない仲介者によって、問題が歪曲され、うやむやな結論が出されることを恐れ、彼らは、断固とした態度で臨む姿勢を示した。

しかし、当時の新聞が伝える状況は、もっと詳しく生々しいものである。たとえば、*The Illustrated London News* は、さらに詳細な記事を掲

げている。「事件は、事実次のような形で始まった」と述べた後、10パーセントの賃金引上げの事情について次のように説明している。「1847年10パーセントの給料削減が言い渡された時、工場主は、職工たちに景気が戻った際には、出来高払いで10パーセントの前払いで、支払いを約束した——少なくとも、後者はそう信じていた——景気が戻ったが、その約束は実行されなかった。職工たちの間で不満が募ったのは当然である」<sup>4)</sup>。

10パーセントの昇給要求の理由については、以上のような事実があったようである。他紙には、職工当事者による、生の声が掲載されている。たとえば、『タイムズ』紙は、職工の代表者たちに対する工場主たちの態度を非難する一職工の投稿記事を掲げている。

……工場主の多くは、職工たちを鼻であしらい、侮蔑的態度で扱った。その乱暴な態度は、容認できるものではない。その結果、解雇された職工は路頭に迷い、要注意人物とされた。いったい何ゆえなのか……悲しむべき体験が、孤独な闘いの愚行を教えてくれた。我々の要求が、一部認められたとしたなら——我々が、下劣なる奴隷のごとく扱われなかったなら——ランカシャーの最高の労働者は、あのような手強き組織を創りはしなかったであろう<sup>5)</sup>。

工場主の傲岸ぶりは、その数日前（15 October 1853）の『タイムズ』紙が伝えた、工場主への公開陳情に見られる職工たちの「抑えた丁重な言葉遣い」と、対照をはっきり表わしている。

従って、プレストンにおけるストライキに関して、ディケンズなど一般人が、職工たちへの同情を最初から持っていたとしても不思議ではない。*The Illustrated London News* は、さらに、職工たちの行動を次のように述べている。「プレストンの機織職工たちは、ストックポート（Stockport [プレストン同様紡績工場の町]）の職工たちがしていたように、[最初] 組合を形成していなかった。そこで、[職工の] 代表者たちは、職工たちのために寄付を集め始めた」<sup>6)</sup>。この募金活動は、職を失った職工たちとその家族に文字通り日々の糧を与えたが、同時に、長引く闘いに対するこころの準備をも示唆したと思われる。

*The Illustrated London News* は、上記の記事のすぐ後で、次のように

伝えている。「プレストンでは、[その後] 機織職工組合が生まれ、その委員たちや元からあった紡績工の組合の委員たちは、職種別に給料値上げの運動を押し進める時期が来たと考えた」<sup>7)</sup>。この報道は、「職工たち」とひとくくりにせず、彼らが、職種別に行動しようとしたことを裏付けている。職種別運動が、闘いを先鋭化するのに役立ったか、統一という面で、マイナスであったかはにわかに判断できないが、「いざと言う時になって、指導者たちは統制力を喪失した」<sup>8)</sup>。

次に、工場主たちがロックアウトを実行した理由についても、*The Illustrated London News* は明らかにしている。「ストライキを敢行して、仕事を放棄した職工たちは、使わない機械を未就労の職工たちの便に寄与した。そこで、連絡を取り合った工場主たちは、工場を閉鎖した。従って、ロックアウトは、工場主のストライキと呼んでもよい様相を呈した」<sup>9)</sup>。このように、ロックアウトについては、工場主たちの行動にも理由があった訳である。

しかし、プレストンの町の人々は、この紛争に直接関わらなかったこともあり、客観的に見ることができたようである。*The Illustrated London News* の記者は、町の人々の声として次のように伝えている。

工場主たちは……職工たちに対する姿勢が厳しすぎる、柔軟性がないとして非難された。従って、町の人々の同情も得られず、暴力行為の温床となったと非難された。繁栄していた時には、職工たちに寛大な態度に出なかったことと、適当なストライキ時期を選ばないとして、職工たちを侮蔑していたことを非難された<sup>10)</sup>。

工場主たちへの一方的な非難は、弱者への同情がなせるものとは言え、工場主たちにも、それなりに落ち度があったと思われる。*The Illustrated London News* は、続いて、次のように工場主たちのロックアウトに際しての行動を非難している。

工場を閉鎖する際、彼らは一ヶ月の予告はしたが、警告や助言を与えなかった。彼らは、職工たちを一堂に集めて説明もしなければ、個々に説得を試みることもしなかった。彼らは、扇動者たちの影響を阻止する適切な手段に訴えることもしなかった。おそらく工場の

規律の厳しさ……ゆえに、彼らの横柄さや傲慢さが生まれたのであろう。このように、ロックアウトを実施する必然性やそのよし悪しを考えた場合、その行動には、疑問を呈する根拠は多々あるのだ<sup>11)</sup>。

新聞の論調が世論を代表するという、現在にも通じる格言は、当時のプレストンの町でも通用したのであろう。ロックアウトに関する前述の工場主側の主張は、かき消されてしまった。

世論は、職工たちのストライキ権を疑問視することはなかったもので、概して彼らに対しては同情が広まった。しかし、2万人もの労働者が、4ヶ月間も仕事をしないため、人々はその無駄を嘆いた。何らかの介入によるか、あるいは労働者側ないしは使用者側、どちらかが勝利すれば、争議は解決する方向に向かうだろう、そのためには両者の十分な理解が前提であり、そうならば、将来このような争議は回避できるだろうと最初は楽観論が一般の人々の間にはあった。

争議解決の機会はたびたびあったようである。例えば、工場主たちは、会合をたびたび開き、打開策を練っている。特に、事件の発端が、「昇給問題」である以上、これをできる限り認めようとの案も出たようである。*The Illustrated London News* は、次のような記事を掲げている。

……昇給の件については、[既に] 前年8月19日に職工ならびに、関係者たちに実施されることになっていた。この昇給は、財政的に保障されたからではなく、[苦しい状況だが] プレストンの町にかつて漂っていた労使間のよき関係を維持するために、余儀なく実施されることになっていた。しかし、この町に不幸をもたらす原因にもなった、邪悪で無責任な輩の妨害によって、職工たちの昇給が阻止されてしまった。見通しは、一段と悪い方向に向かっている<sup>12)</sup>。

「邪悪で無責任な輩」は、『困難な時代』では、職工たちを扇動するスラックブリッジ (Slackbridge) に代表され、'On Strike'では、グラッフショー (Gruffshaw) として描かれたが、実際は、実在のストライキの指導者、モーティマー・グリムショー (Mortimer Grimshaw) をモデルにしていることは判明している<sup>13)</sup>。ディケンズも直接彼の激烈な演説に接しており、それはそのまま『困難な時代』第四章「同志諸君」に長々

と描かれている。職工たちは扇動者に乗せられ、工場主たちは尊大な態度を変えない状況が、紛糾解決を一層困難にしていった。

以上、プレストン・ストライキの原因と、ディケンズが関わった箇所を中心に検討した。このストライキは、ディケンズがロンドンに帰った後も3ヵ月半も続いた。しかし、指導者たちが、注意深く支援者たちを統制し、暴力を回避したため、ウィガンでのように、兵隊や警察隊が出動する騒ぎにはならなかった。そのうち、近郊の織物産業の町々の労働者たちから寄付の形で頼っていた支援金も枯渇したため、ストライキは終焉に向かって行った。

次に、この件についてのディケンズの取材と見解について検討する。

## 2. プレストンにおけるディケンズの取材と視察

ディケンズは、プレストン・ストライキに関する取材の様子を「ストライキ中」(‘On Strike’) と題して、『ハウスホールド・ワーズ』(1854年2月11日)に掲載し、読者に報告している。実際には、編集助手のウィルズ(William Henry Wills)が同行したが、言及がないように、この取材と視察の報告は、虚実ない交ぜになっていると思われる。しかし、ストライキ実行者の職工側と、ロックアウト実行者の工場主側への彼の想いは垣間見ることができる。また、プレストンの町の現況報告は、事実を即したものであることも判明している。

まず、プレストンへ向かう駅馬車で同席した男との会話という設定から報告を始める。ディケンズが「スナッパー氏」(Mr. Snapper) [癩癩持ちの、がみがみ言う人] と綽名した男は、「連中 [職工たち] を、ギョツという目に合わせないといけない。そして、彼らを正気に返らせる必要がある」と言って、終始職工たちに厳しい姿勢を崩さない。そして、この男に、支持する側を明白にするよう強要された時、ディケンズは「両方の側を [支持して] よいのではないか」と応え、さらに、「使用者と被使用者との関係には、我々の人生におけるように、感情といったもの、相互の理解、忍耐そして気配りなどが入り込む必要があると信じています」と付け加える。

しかし、ディケンズの意向は、どちらかといえば、職工たち擁護へと傾きがちである。工場主たちの行動を、次のように、スナッパー氏に言

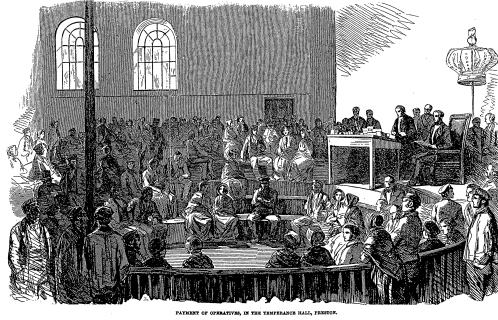
明している。

分別あるはずのプレストンの工場主の皆さんは……この不幸な紛争の序盤で、何らかの団体——自分たち自身で作っているにもかかわらず——に入っている職工は、今後雇わないという規則を決めてしまった。そして、高圧的な態度で偏った不公平なことを実行に移した結果、[操業を]放棄せざるを得なくなったのです<sup>14)</sup>。

工場主たちの行為を批判するディケンズの言葉に、スナッパー氏は苛立ち、性急に解決法を求めるのに対して、ディケンズは次のように応じる。「もし労働者たちが、誤った行為をしたとしても、気高い美德を持っているなら、彼らと雇用者たちとの関係に欠けているものはほんの少々です。しかし、それは経済学の本でも、軍法会議の裁定でも補うのは困難でしょうし、簡単に見出せるものでもないでしょう」。ディケンズの返答は、抽象的で少々曖昧だが、『困難な時代』の悲劇的な労働者ブラックプールの姿勢を精査することによって、少しずつ明らかになるとともに、この作品での作者の意図も透けて見えてくる。この点は、後に詳しく分析するとして、さらにプレストンでの彼の行動を見てみよう。

「私が目にしたいのは、ストライキに突入しているプレストンの人々がどのような行動をとっているかだ。そして、不利な状況の中で、どのような資質……を見せるのかを確認したい」<sup>15)</sup>と述べて、ディケンズはプレストンの町の様子を覗う。町には、労働者たちと工場主たち両方のポスターが貼られ、プラカードがあちこちに立てかけられて、町行く人たちの賛同を求めている。労働者の集会が、故ダービー卿の名をとった競技場で行われるのを知って、早速そこへ赴く。彼がそこで目撃したものは、書記と議長を中心に、各地から馳せ参じた代表者たちと労働者たちが周りを囲み、寄付金の決算の正当性を議論している現場であった。それは、労働者同士の個人的中傷という不毛な議論に墮す傾向にあった。

しかし、真剣さ・勇気・沈着さを感じさせる人物が、むしろ多くいることを知り、ディケンズは、この集会の意義を認め、彼らが誠実な人たちであり、態度の立派さに感動している。「彼らの驚くべき勇気と忍耐力、彼らの間にある高い名誉心……」。結局、悪いのは「意図的に騒動を起こそうとする輩」なのだ。彼らは、いたずらに問題を大きくするだ



図版1 *The Illustrated London News* (12 Nov., 1853) より

けで、ストライキを真剣に考えようとはしない。『困難な時代』で滔々とスピーチをし、聴衆に檄を飛ばす人物のように、背信者や中傷者探しを専らにし、仲間はずしにエネルギーを傾ける輩こそ、労使双方の敵という確信を抱いて、ディケンズは集会の場を去る<sup>16)</sup>。

ディケンズは、翌日(1854年1月29日)、集められた寄付金の分配の様子を報告する。その状況は、1853年11月12日の *The Illustrated London News* に掲載された絵を髣髴させるものである。まず、その絵の解説を試みよう。場所は、The Temperance Hallとある。Cockpitのまわりには、男性の他に若い女性も混じっている。支払いを受ける職員の妻あるいは娘たちであろう。一段高い中央の机には、議長とおぼしき人物が座り、全体を統制している。彼は、その脇で、氏名と渡す金額を呼び上げる人物の指示に従って、一定額を該当者に支払っている。受領するものたちは、静かに順番を待っている様子が覗える。(図版1参照)

次に、‘On Strike’から抜粋してみよう。

会場は半分ほど埋まっていたが、多くは女・子供であった。彼らは所在なしに座っていた。……私は、あたかも支払いを受ける一人のような顔をして、様子を覗っていた。すると、昨日日記が占めていた場所に、小さな汚いテーブルが置かれ、その上には、半ペニーが5ペニー分あった。最初、誰がこの小額を受け取るのかと疑問に思っていたが、支払いが始まって分かった。それはお釣りに使うものであった。支払いを受ける者は、皆順に並んで混乱が起きないようにして、最後には、テーブルのそばを通過して出て行くのだった<sup>17)</sup>。



一方、この場には、小額を寄付して支援の姿勢を示す女性たちの姿もあった。

多くの独身女性たちは、一人6ペンスずつを寄付して、ストライキに出ている家族を週ごとに支援するのであった。彼女たちは、皆すっきりした健康そうな様子であった。そこには、むっつりした顔なぞひとつも見られなかった<sup>18)</sup>。

寄付金は少額であり、どれほど足しになったかは疑問であるが、ディケンズはその額より、優しい協力者の姿に労働者への同情心を刺激されたようである。寄付する者と支払いを受ける者、ともに整然と行動する様子に、ディケンズは感動の言葉すら述べている。このような情況もまた、ストライキを実行した労働者への同情を高めた要因でもあろう。結局、ディケンズは、「ストライキ中」の記事を次のような言葉で締めくくっている。

いずれにせよ、このストライキとロックアウトは、不幸な出来事である。時間と人々のエネルギーと賃金の無駄である。働く人々の生活を脅かし、利益は同等であるべき両者の間の亀裂は、時間を追うごとに大きくなり、実に国家的災難である。しかし、この危機に際し、怒りのおもむくままに相手を痛めつけることはすべて無益である。……経済学は、そこに人間性と人間的温かみが通わなければ何の意味もない<sup>19)</sup>。

プレストンでのストライキ視察は、それ以前のストライキにおける労働者に対するディケンズの姿勢に微妙な影響を与えている。それが、『困難な時代』に反映していると考えられるので言及しておきたい。従来、彼は、ストライキをして、信頼を裏切るような労働者の行動が理解できなかったようである。1850年（プレストン・ストライキの3年前）、ノース・ウェスタン鉄道で運転士やかまたきがストを決行した時、「彼らがたまたま所有した力を揮って、公衆の害と危険を引き起こすなら、彼らの道徳的権利と正当性を阻止しなければならない」<sup>20)</sup>と厳しく断じ

ている。

しかし、他方で、彼は、労働者に対する信頼を完全に失っているわけではない。「彼らは、誠実な人たちであると固く信じている」とも言っているからである。では、何が、誰が悪いというのか。ディケンズが得た解答は、「悪いのは、ストライキの指導者であり、彼らの邪悪な謀によって、労働者たちを巻き込んでいる」という考えであった。彼は、この見解を一貫して持っていたようである。プレストンを去る時も、工場主と労働者、いずれをも批判せず、別なところに争議の悪化の原因を求めている。悪いのは、「何かを企て、騒乱を引き起こそうとする輩だ」というものである。

ディケンズは、このプレストン視察を、小説にどのように生かそうとしたのであろうか。

### 3. 『困難な時代』で描かれたストライキの意義

ディケンズは、1854年3月4日の *The Illustrated London News* に掲載されたピーター・カニングム (Peter Cunningham) の掲載記事に対して抗議している。その経緯を精査する中で、『困難な時代』に込めたディケンズの意図が垣間見えるかもしれない。まず、カニングムの見解：

ディケンズ氏の新しい小説は『困難な時代』である。氏の最近のプレストン・ストライキ視察によって、小説のタイトルが生まれたと言われている。実際、いくつかの点で物語の流れが、その体験によって暗示されている<sup>21)</sup>。

これに対して、ディケンズは3月11日、次のような書簡をカニングムに送った。

君がそんな情報をどこで仕入れたのか知りませんが、はっきり言って君は間違っています。タイトルはすでにずっと以前に決まっていたし、私がプレストンを訪れ、ストライキについて考える数週間前に、物語も数章がすでに書き終わっていたのです。

そのような記事が与える悪影響には二種類あります。一つは、本がそのように突然、強引な形で生み出されるなどありえないと一般読者に信じ込ませてしまうこと。……二つ目は、今回の場合、次のような問題を含むのです。つまり、あなたのような言い方をすると、イングランド中の労働者全体に直接関わる問題を孕む物語を（あなたのような読者に関して言うなら）矮小化してしまい、登場人物を、私が会ったこともない、名前も聞いたこともない実在の人物に当てはめてしまうのです。そういったことは、経験からよく知っています……<sup>22)</sup>。

ディケンズの主張は果たして正しいのだろうか。D. シャスターマンは、『困難な時代』の案が浮かんだのは、1853年のクリスマスから翌年の十二夜（1月5日）の間であろうと想定している<sup>23)</sup>。また、新小説のタイトルに関するフォスター宛の有名な書簡は、1854年1月20日の日付になっている。さらに、ディケンズがプレストン・ストライキ視察を敢行するのが同年1月28～29日である。その間9日余りしかなく、タイトル決定が、プレストン視察の数週間前とするディケンズの主張は成立しない。「物語も数章がすでに書き終わっていた」とする言辞も言葉通り受け取ることはできない。さらに、同年3月23日付のクーツ女史宛の書簡では、「[書き終えたばかりの『困難な時代』の] 第1ページが小生の前に置かれています<sup>24)</sup>」と言って、新しい作品の執筆を前に武者震いしている自らの姿を伝えている。ここでも、原稿の執筆の余裕は感じられず、「数週間分を書き終えている」というディケンズの言い分は受け入れられない。

なぜ、ディケンズは、ほどなく事実が判明するにもかかわらず、誤解を招くようなことを口にしたのであろうか。実際には、フォスターが明言しているように、カニンガムとの関係は従来良好であったし、その後も、二人は予想と違って、良好な友人関係が続けて行った<sup>25)</sup>。だとすると、ディケンズは、書簡集編者が言うように、単に「誇張した言い方をした」に過ぎない、つまり、あまり真剣にカニンガムに噛み付いたわけではないということになる。では、プレストン・ストライキを、ディケンズはどのように捉えようとしていたのであろうか。それと関連して、物語の人物と実在のそれとの類似点と相違点を精査した上で、『困難な

時代』に込めたディケンズの意図を探ってみる。

ディケンズは、プレストンに到着翌日付（1854年1月29日）の書簡を、フォスター宛に送っているが、その書き出しは、失望感漂うものである。「この町では〔小説の題材として〕多くは得られないでしょう。……代表団が、本日近隣の町から得た寄付金の報告をします。明日その金が支払われます。その両方の儀式を見物したら戻るつもりです」<sup>26)</sup>。そして、プレストンの町を‘nasty’「荒涼としてすさんだ〔町〕」と呼んでいる。しかし、‘On Strike’では、職工たちに対しても、工場主たちに対しても、好意的な態度を表明している。この落差は何を意味するのだろうか。

この落差の中で、ディケンズの真の意図を探るためには、さらに考察を広げる必要がある。つまり、この小説全体で表そうとしたものを正確に捉えて、そこから発射される光を基準に、ストライキという形で現れた労働者と工場主の対立を分析することである。

ディケンズが、この小説で描こうとした問題は、物語冒頭で暴露される事実重視の教育批判、それと対比的なファンシーと想像力の称揚という、二項対立的図式にあることに疑問はない。物語冒頭で描かれる、グラッドグラインド校の「事実重視教育」は、枢密院教育委員会の教育局長ジェイムズ・ケイ・シャットルワース主導の公教育論と深い関連を持ち、国の教育というもっと大きな論争へと拡大する可能性を含んでいた。ディケンズによれば、そのような教育は、子供時代に育まれるべきファンシーと想像力を阻み、児童の精神生活を枯渇させるばかりでなく、それらが、大人社会においても人間関係を豊かにする潤滑油として機能する力を喪失させるという。

「事実重視教育」が、グラッドグラインドに採用された師範学校（Normal School）出身のマッコークカムチャイルド先生によって展開される。師範学校制度は、政府のお声がかかりで1846年、正式に発足し、新しく建設された学校には師範学校出身者が次々と採用されていった。ディケンズは、彼らの存在を次のように描いている。

彼とおよそ140人ばかりの教師たちは、最近、同じ時に、同じ工場  
で、同じ原則に基づいて、140のピアノの脚のように、ろくろにか  
けて作られてきたのだった。彼らは、限らないほどさまざまな能力

を試され、ずいぶん多くの、頭の割れそうな質問に答えてきた。(第二章)

師範学校を工場に見立て、その教育を文字通り機械的とする、いつものディケンズの誇張表現が、教育方法への批判の可否は別として、的を射たものであることは、ケイ・シャトルワース自身の師範学校成立に関する回想録 (*Four Periods of Public Education, 1832-1839-1846-1862*) 等に明らかである。

さらに、『困難な時代』を教育の問題から攻撃を広げようと彼に決意させた時局的な問題もあった。それは、この小説を書き始める頃話題となった政府の技芸局 (the Department of Practical Art) が発したアナウンスメントの内容である。この局は、図工やデザインなど技芸に関わる問題を扱う部局である。この部局の監督責任者のリチャード・グレイブ (Richard Grave) は、「審美眼」(‘taste’) とは、「容認された原則 (acknowledged principles)」と「規則性 (rules)」に依拠すべきであり、「生来の感情や感覚」に頼るべきものではないこと、さらに、そのような原則という観点から言えば、「色彩は目に心地よいように、一定の数でまとめられる必要がある」などと講演等で主張していた<sup>27)</sup>。

ディケンズは、この見解を拒絶し軽蔑した。『困難な時代』の冒頭で、授業を参観する「紳士」(派遣された視学官らしき人物) は、「空想」という言葉を使ったシシー・ジューブに向かって次のように言い論ずる。

「……そんな空想的なことが起こらないようにするためには、君は、数学的図形を (それも基本三原色でだ) 組み合わせたり、修正しなければならない。しかも、それらは証明や立証が可能なものでなければいけない。これが新しい発見なのだ。これが事実なのだ。これが審美眼というものだ……」。(第二章)

ディケンズの誇張表現が、「審美眼」の解説を愚劣なものにしている。このような部局を政府が設置した理由のひとつとして、*The Illustrated London News* は、イギリスの装飾技術がヨーロッパの国々の装飾技術に劣ること、それに対応する必要性から来ていることを報じているか<sup>28)</sup>、ディケンズの経験からすれば、個人の趣味にかかわる問題は、国家が統

制すべきものではないのだ。

そういう中、時局的な問題に対するディケンズの軽蔑の輪は一段と広がった。彼は、プレストンを訪れる2、3日前にシャトルワースが、学校教育における技芸局の役割の重要性を称える演説を新聞で読んでいた。その中で、シャトルワースは、プレストンの職工たちの行動を非難し、無教育な者たちの再教育の必要性を説いた。同時期に、ディケンズは、プレストン・ストライキのリーダーの一人ジョージ・コーエル (George Cowell) の演説をやはり新聞で読んでいた。演説の中で、彼は「世界から経済学なるものを駆逐するのが早ければ早いほど、国の労働者階級にとっては幸せであろう」<sup>29)</sup>と云って、シャトルワースを明確に攻撃した。この表現は、ディケンズがプレストンへ向かう駅馬車の中で、「スナッパー氏」への反論に用いた文言そのものである。

プレストンは「荒涼としてすさんだ」町であり、物語のコークタウンを髣髴とさせる。そこでは、労働者と工場主は対立し、相互理解も感情的な交流もない世界であり、ディケンズ流に言えば、ファンシーが欠落し、想像力の伸介の力の欠けた町である。その町では、グラッドグラインド家におけるように、家族の絆は破れたままである。ディケンズは、注意深く幼女期のルイーザの生活から、ファンシーや想像力の世界を一切排除する。「その顔には、照らすべきものを持たぬ光、燃えるものを持たぬ光、かろうじて自らの生命を保っている飢えた想像力が見られた」。(第三章) 彼女は、何かしら不満を抱きながら、自らの意見を持つことなく、後に、父親ほどの年齢の銀行家で工場主のバウンダビーとの結婚を承諾してしまう。弟のトムは、後に犯罪者となり、父親の面目を失墜させる。

バウンダビーは、プレストンの工場主たちの傲慢な態度を拡大誇張された人物として描かれているが、その人物像は「自助の男」(‘self-help man’) というメタファーによって表される。それは、産業革命の余得として、低い地位から身を起こし、栄光の座に登るといふ神話のもとに生み出されたメタファーである。ディケンズは、このメタファーに反発を感じた一人であるらしい。人知れず苦労を重ねた人物が、獲得した尊敬すべき地位に反する行動に走る姿を描く時、彼は秀逸なドラマを展開させる。苦労の末、師範学校を出て順風満帆の人生を歩むかに見えたブラッドリー・ヘッドストーンの墮落を筆頭に、ディケンズの「自助の

人」は、サミュエル・スマイルに反抗する。

ディケンズは、さらにバウンダビーの複雑な心理構造を描き出している。悲劇の労働者スティーブン・ブラックプールを恫喝する傲慢な工場主というばかりでなく、バウンダビーは、上流社会への苛立ちを、スパシット夫人を寄宿させることによって見せている。彼女に寄宿を認めつつ、バウンダビーは、上流階級出身者の見栄を嘲笑って、自己の権力を愉しんでいる。彼は、新たな産業の発展がもたらした、工場主という地位の意味をはき違えたことによって、ディケンズに鉄槌を下される人種の一人であり、プレストン・ストライキで無責任な要求を出して、それを混乱に陥れた工場主の象徴である。

一方、労働者の苦難と孤独は、悲劇的なスティーブン・ブラックプールを通して描かれる。彼は、ストライキに加担したプレストンの職工たちと違い、あくまで組合への加入を拒んだため、村八分的扱いを受ける。彼の描写がセンチメンタルに過ぎ、工場主と労働者の軋轢をずるく回避する人物という批評もあるが<sup>30)</sup>、他方には、次のような見解も現実にあるのである。

ストライキで苦境に陥っているのは、現在工場主とは対立しておらず、組合に援助を求めない者たちである。彼らは、この事件で非難される点のない者たちである。その数は、どのくらいか不明であるが、相当数に上るであろう<sup>31)</sup>。

従って、スティーブンの異常とも思える行動と、それからくる疎外は例外とは言えず、むしろ彼の孤独は、ストライキなどに見られる労働者のひとつの型と考えられる。しかし、彼はそれ以上の役割を負わされている。作者の意図を伝えるメッセンジャー役である。それは、バウンダビーとの対決の中で明らかにされる。

……あの連中 [労働者たち] は、お互えに誠実で、お互えに忠実で、お互えに愛しあつとります。……どんなわけで、俺たちに備わった最善のもんが、俺たちを揉め事と不幸と過ちに向かわせるんか、わからねです……。 (第五章)

不幸の原因を示唆するディケンズの筆は、少々あからさまな感じはあるが、物語冒頭のファンシーと想像力の欠落した世界が、信頼と愛情の欠落した労働者と雇用主の関係にも及んでいることを、ステイーブンとバウンダビーの対立の中にも表現することに成功している。

『困難な時代』は、プレストン・ストライキを契機として生まれたかもしれないが、それをなぞったものではないし、労働者と工場主の対立を描くことが最終目的ではなく、ファンシーと想像力に育まれた人間的感情と信頼の欠落がいかに重大な結果をもたらすかを描いたものである。ディケンズのカニンガムへの書簡は、作品の意図を親しい友人でさえ誤解することの危惧を表したものといえる。

#### 注

- 1) K.J. Fielding, "The Battle for Preston," *The Dickensian*, Vol.L1954, p.159.
- 2) *Ibid.*, p.159.
- 3) *Ibid.*, p.160.
- 4) "Preston Wages Dispute," *The Illustrated London News*, 12 Nov., 1853.
- 5) *The Times*, 20 October 1853, p.8., quoted in Ann Smith's 'Hard Times and The Times News Paper,' *The Dickensian*, Vol.LIII. 1968, p.202.
- 6) *The Illustrated London News*, 12 Nov. 1853.
- 7) *Ibid.*, 12 Nov. 1853.
- 8) Fielding, *op.cit.*, p.162.
- 9) *The Illustrated London News*, 12 Nov. 1853.
- 10) *Ibid.*, 12 Nov. 1853.
- 11) *Ibid.*, 12 Nov. 1853.
- 12) *Ibid.*, 12 Nov. 1853.
- 13) Fielding, *op.cit.*, p.161.
- 14) 'On Strike,' *The Household Words*, 11 Feb. 1854.
- 15) *Ibid.*, 11 Feb. 1854.
- 16) *Ibid.*, 11 Feb. 1854.(キリスト教系のジャーナル、*The Reynolds's Weekly Newspaper* には、「ディケンズ氏は、月曜日に10分ほど会合を見学していた。かの紳士は、ふさふさとした頬髯を生やしていたが、ディケンズとは知らず、多くの者は著名な外国人と見ていた」とあるという。Quoted in Peter Ackroyd's *Dickens* (Vintage, 1999), p.726.
- 17) 'On Strike,' *The Household Words*, 11 Feb. 1854.
- 18) *Ibid.*, 11 Feb. 1854.
- 19) *Ibid.*, 11 Feb. 1854.



- 20) Ackroyd, *op. cit.* p.727.
- 21) *The Illustrated London News*, 4 March, 1854.
- 22) Graham Storey eds., *Letters of Charles Dickens*, Vol.5.(Clarendon Press, 1981), p.237. 編者も「ディケンズは少々誇張している」と注を付けている。
- 23) David Shusterman, 'Peter Cunningham, Friend of Dickens,' *The Dickensian*, Vol.LVII. pp.28-29.
- 24) Storey eds., *op. cit.*, p.237. n.
- 25) 宮崎孝一他訳 『定本チャールズ・ディケンズの生涯』下巻、研友社、123頁参照。
- 26) Storey eds., *op.cit.*, p.260.
- 27) Ackroyd, *op.cit.*, p.728.
- 28) *The Illustrated London News*, 4 March, 1854.
- 29) Ackroyd, *op.cit.*, p.723.
- 30) Sylvere Monod, *Dickens the Novelist* (Univ.of Oklahoma, 1967), p.196.
- 31) Ann Smith, *op. cit.*, p.203.